

ちば発
第39号

千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会 広報紙

く ひら
暮らしを拓く



「グループホーム運営して11年、今思う事」

特定非営利活動法人 鎌ヶ谷たんぽぽクラブ
理事長 小宮 裕子

「うちで踊ろう、ひとり踊ろう♪…僕らそれぞれの場所で重なり合うよ♪」
コロナ禍、息苦しいムード漂う自粛生活の中で星野源さんの柔らかい歌声にほっと心和む。家に居るのも良いものだよと思えてくる。
グループホームの皆さんにも、今は外出が儘ならない不自由な思いをさせてしまっている。息抜きのために利用していた移動支援は使えず、カラオケやボーリングも自粛をお願いしている。ホームで過ごす時間が長くなっているけど「まずまず居心地良い住み家」と安心して過ごしてくれているよう願っている。

今から12年前、平成21年元旦にグループホーム第1号店を誕生させた。当時運営していた作業所に通所する一人が「親亡き後」問題に直面したことを受け、後先あまり深く考えもせず勢いのまま事業開始に踏み切ったのだった。

結果、資金繰りや住居・人材・利用者探しに走り回り、開所後は数々起こるトラブル対応に四苦八苦を繰り返した。人様をお預かりし、その方の生活や安全に大きな責任を負うことの重さを噛みしめる日々だった。

グループホーム開設は、今や一種のブームのようだ。湧き出すように次から次へと新しい事業所が開設されていくのを驚きをもって見守っている。こんなに気苦労の多い事業に、何故多くの方が挑もうとするのだろうか。安易な気持ちで事業に乗り出す法人が増えてしまうのではないかと懸念していた。

そんな時、相談員さんから軽度障害の男性の受け入れについて問い合わせが入った。現在利用中のホームと上手く関係性が築けなかったらしい。その事業所も障害者支援経験が浅い法人の運営で最近開業したものであったため、少し気になって情報を求めた。

すると、第三者からの評価は思いのほか上々で、自身の勉強不足を反省することとなった。利用者対応に熱心に努めておられ、先の彼に対しても真摯に臨んでいらっしゃったとの話が耳に入ってきた。重度障害の方の受け入れも積極的で、そこに合わせた生活ルールが整いつつあり、彼のような軽度障害者にはそれがしっくりとこなかったようだった。彼のようなタイプには軽度障害者への対応経験を十分に重ね、程よい受容と程よい突き放しを巧みに使い分けられるようなホームが合っているのかもしれない。利用者の悩みどころはそれぞれ、事業所側の特性・得意分野もそれぞれ、入居者受け入れにあたってはお互いの相性が肝心である。

近頃は利用者がサービスや事業者を選べる時代だ。一人ひとりの個性も求める生き方も違うのだから、たくさんの選択肢が用意されているのは喜ばしい。利用者に寄り添い共に歩いていこうとする事業者の数も確実に増えているはずだ。障害を持つ人も生きやすい社会に、少しずつ向かっているのかもしれない。希望をもって、利用者の皆さんと共に今はステイホームの日々を出来る限り楽しもう。

第12回千葉県障害者グループホーム大会を開催しました。

基調講演「誰もがありのままに、地域で暮らす…支援の原点」

グループホーム（以下GH）は年々増え、入居者もGHの形態も多様化しています。今年度は新型コロナウイルスへの対応を通し、GHでの生活の在り方・支援の在り方・日中サービス提供機関との連携の在り方等が問われました。

「一人一人に見合った暮らし」を支援する際の原点、GHの実践を通して見えたこと、GHの現状と課題、今後の在り方等を、GHの歴史を踏まえ、「誰もがありのままに、地域で暮らす…支援の原点」と題し、社会福祉法人さざんか会理事長 宮代隆治氏にお話しいただきました。

まず、GH誕生の背景や制度設計についてのお話がありました。GHが制度化される前は「障害者は、保護し、指導訓練という狭い意味で更生させなければならない存在」であり、そのための施設を増やしていくことが主流でした。そんな中、当時北海道福祉課長を経て厚生省障害福祉課長だった浅野史郎氏はGH制度設立に情熱を燃やしたそうです。

身辺自立や就労要件など、条件付きの入居ではありましたが、GHの制度は動き出しました。宮代氏は「親（家族）が丸抱えする存在、或いは施設に委ねざるを得ない存在から一市民として自立した存在へ」そう述べています。その後、精神障害者GH制度や重度加算の創設、就労要件の撤廃など、より多くの方が利用できる制度へと形を変えていきます。しかし、新たな課題も生まれてきました。入居者の重度化高齢化や強度行動障害を有する人たちの地域生活をどう支えるか、個々のニーズに合った生活の質の保証など。

それらの課題に対し、宮代氏は「GHのあり方、そして営むことの意味の理解。損得を超えて、理念に近づくことを大切に」と原点に立ち返ることが大切と語ります。

現在、全国には13万人以上の障害者が地域で暮らしています。「誰が地域で暮らせるか」ではなく、「望む人誰もが地域で暮らすことができる、その一つとしてGHに住まうことが当然となりますよう。そのために制度の更なる充実を望みます」と締めくくられました。



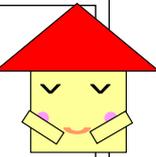
分科会1「地域と繋がるグループホームを創るために」

地域の関係機関と繋がる積極的な取り組みをされている千葉県内の障害者グループホーム事業者さんに登壇して頂き、グループホームと地域の関わりの現状と課題について語って頂きました。様々な事業を展開し、積極的に地域と繋がっている3法人の代表の方の実践報告の後、コーディネーター（社福）ロザリオの聖母会 ナザレの家あさひ所長 荒井隆一氏とのトークセッションを行いました。社会福祉法人彩会事務局長 橋本めぐみ氏、社会福祉法人三芳野会グループホームみよしの管理者 岡田まゆみ氏、特定非営利活動法人みのり福祉会理事長 立田芳弘氏より地域との関係についてのお話を頂いた後、シンポジウムを行っています。コロナ禍で地域との連携や関係機関との信頼関係が重要というお話があり、コロナ禍で支援者の覚悟が問われている。グループホームを選べる時代になった事が重要である。

新型コロナウイルスへの対応も検証しながら自分のものにしなくてはならない等の意見が出ています。



分科会2 グループホーム従事者のメンタルケア with コロナ



第2分科会では、『グループホーム従事者のメンタルケア with コロナ』と題し、新型コロナウイルス感染症の対応に追われる中でのメンタルケアについて取り扱いました。

ここからクリニック院長 佐多範洋氏からは、医師の立場から、感染拡大を防ぐために必要な行動は何か、グループホームで感染者が発生した場合予想されること、セルフメンタルケアの方法などを教えていただきました。

仙台市グループホーム連絡会事務局長 横谷聡一氏からは、未だ復興の続く東日本大震災の経験を交え、震災とコロナ禍に通じる状況や、極限状態でのストレスで何が起き、必要とされたケアは何かについて伺いました。

ディスカッションでは、震災時に横谷氏が体験した困難さと救われたことや、現在の千葉、仙台でのグループホームを繋ぐネットワークなどについて討議を行いました。未曾有の自然災害、終息の見えない感染症と種別は違いますが、危機介入と緊急支援の必要性を共通して感じました。



分科会3 多様生活探訪 ～一つじゃない、グループホームでの様々な暮らし方～

今年度のグループホーム大会・第3分科会は、新しい様式で皆さんに観ていただきました。「多様生活探訪 ～一つじゃない、グループホームでの様々な暮らし方～」と題して、3名の入居者の暮らし方を映像にて伝えました。毎年、会場で登壇者と参加者とのやりとりが繰り広げられるのですが、今回は、送り手から受け手へと、一方的なものとなってしまいました。「ありのままに…」「その人らしく…」という雰囲気は伝わったでしょうか？

グループホームの支援者の方々のお話にも心強いものを感じました。

今回は、視聴する方にも変化が…。当事者の方で、毎年参加してくれる方がいます。YouTubeでの視聴のため、グループホームの職員と一緒に観てくださいと話したのですが、“パソコンを購入して、視聴しました”という報告もありました。うれしかったです。皆様、ご視聴ありがとうございました。



分科会4 障害者グループホームとは？～サービス内容について知ろう～

例年、参加者から「今後、障害者グループホームを利用したいと思っているので、制度や生活の様子、お金のことなどを聞ける場が欲しい」とのご意見を頂いております。今年度は、動画配信での開催となったことから支援ワーカーが作成した資料を用いて、制度説明の動画を作成し、皆様にご視聴いただきました。

総括

今大会は初のYoutube配信での開催でした。再生回数は基調講演 937回、第1分科会 1142回、第2分科会 1200回、第3分科会 1204回、第4分科会 544回で、総数は5027回でした。参加申し込みは県内外、約470名。アンケートからは「GHの基本や原点を知る機会となった」「地域とのかかわり方が参考になった」「ストレスとの向き合い方の参考になった」「様々な暮らし方が観られて良かった」との声が寄せられました。また、「いつもは一つの分科会のみ参加だが、今回は全体が観られて良かった」と同時に、「もう少し短時間で」とのご意見、「音声聞き取りにくい」等の技術的なご指摘もありました。

今回は皆様と直接お会いし交流することの必要性和同時に、全国の方に、時間を問わず観ていただける利点も実感しました。次年度に繋げていきたいと思っております。(部会長 石塚友子)

き ど あい らく 起 努 逢 楽

のコーナー

「起業する努力、出会いがあって楽になる」障害者グループホーム等支援ワーカーは新規開設のお手伝いをします！
また開設後の応援もしています！



長生・夷隅圏域のグループホーム等支援ワーカー（以下 GHW）の職に就きもうすぐ1年になるとうとしています。新人の私が2020年4月から始めた事は、圏域内の各グループホーム等（以下 GH）へのご挨拶に伺う事でした。

新たな出会いは毎日が新鮮で楽しく、今では仕事の悩み相談や情報交換など気軽に行える GH 管理者や世話人との繋がりが増えて、仕事の面白さを感じています。

そして、圏域には3市8町村あり、各障害福祉担当課にも用件がある度に大変お世話になっていて GHW の活用をお伝えしています。

入居希望者との最初の出会いは「私は GH に入りたいです！」と自分の意思としてお話しされる方は少ないです。大抵、GH の存在を知らなかったが周りの支援者に勧められて GH って何？どんな所？と不安顔で出会います。GH の説明をしていくうちに興味が出てきて、どんな所か見てみたいとなれば後日計画相談員と本人と一緒に見学に行きます。実際に見学し質問して分からなかった事が分かり、ここに住むとどんな暮らしだろう？となれば体験入居となります。こうして順序を経て、本人の納得と家族の理解、支援者の応援があり GH に入居されます。生活の場として安心してその人らしく暮らされているのか？その姿を見届ける事が私の仕事であり喜びでもあります。そして、人生の分岐点に私は関わっているという責任を常に感じています

一方、この圏域では GH を開設したいとの希望者が増えてきて相談にのっていますが、障害福祉の現場を経験した方が多く、障害を持った方達への支援について熱意を持って語られます。本当に嬉しく頼もしく思い、遣り甲斐のある GHW 事業の一員である事に誇りをもって今後も取り組んでいきたいと思っています。

長生・夷隅圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 金沢 千絵

【長生夷隅圏域の概況】

茂原市・いすみ市・勝浦市・長南町・長柄町・睦沢町・一宮町・白子町・長生村・大多喜町・御宿町

（令和3年1月31日現在）

事業所数 25 ・ 生活ホーム 2 事業所 住居数 63 ・ 生活ホーム 3 定員数 343 名

編集後記

今回のグループホーム大会は新型コロナウイルスの感染防止の為、YouTube での配信になりました。会場で皆さんにお会いできないのはとても残念ですが、日本全国から多くの人に参加して頂き、新時代への扉が開いた感もあります。変化が求められるこの時代、柔軟な発想で乗り切って行きたいです。



発行者 千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会

事務局 海匝圏域障害者グループホーム等支援ワーカー
旭市ロ-838

(社会福祉法人ロザリオの聖母会 海匝ネットワーク内)

編集担当

野田圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 大橋 宣彦